

服飾における触覚の記憶

——『ユルスナールの靴』をめぐって——

山崎稔恵（服飾美学会・関東学院大学）

いまは亡き須賀敦子が『ユルスナールの靴』「プロローグ」冒頭にしるした文章——「きっちり足に合った靴さえあれば、じぶんはどこまでも歩いていけるはずだ。そう心のどこかで思いつづけ、完璧な靴に出会わなかった不幸をかこちながら、私はこれまで生きてきたような気がする」。本発表では、この「きっちり足に合った靴」をめぐる言説が触覚の記憶を通して芸術の位相へと変奏してゆくさまをみてゆく。

幼い頃、外国人シスターの黒い靴に「いきなり西洋をみてしまった気持」にさせられ、またヨーロッパの街を歩き、靴底を通してのぼってくる舗石の感触にその国の人びとの思想を知った須賀にとって、「きっちり足に合った靴」とはヨーロッパとヨーロッパ人のメタファーであり、しかも生きてゆくに必要と思われた靴であった。そのかの女がフランスの作家マルグリット・ユルスナールの著作に出会い、その作風に魅せられてゆく。随筆ではかの女の84年の生涯が最初から終わりまで、ユルスナールの「横でボタンでとめる、いわばちっちゃい子ふうの靴」について言及されてゆく。そして、ゆるすぎることもなくきつすぎることもない靴への憧れを通して語られたのは、たましいをつつみこむようなやわらかさと内面の豊かさをもちながら、たましいの奥にまっすぐ届くような強靱さをそなえた文章への到達であった。

思えば、靴が足に合っているかどうか、歩き易いかどうか、足に合った靴を履いているときの感触、そうでない靴を履いているときの感触はもはや滲みついてはなれない。この触覚の記憶が覚醒のスイッチとなり、フィジカルにもメタフィジカルにも「きっちり足に合った靴」の深層に濃い翳をおとしてゆく。読者は次第に須賀が履いているのと同じような靴を履き、息づかいに耳をすましながら、ともに歩き、靴底からのぼってくる感触さえも足の裏に感じながら、綴られる思いに心を重ねてゆくことになるだろう。

作者と作品そして読者との、こうした関係の深まりは、服飾が人間に固有のものであり、微妙な感覚を伴う複雑で興味深い問題を投げかけてくるからにほかならない。人間が服飾に細やかな心情を託しあrawすこともあれば、「纏い」「被り」「履き」「携え」という行為のうちに服飾が人間に働きかけてくることもある。いずれにしても、あるひとつの服飾描写、それは意識的具象であるが、それがたとえ表層では単調なあらわれにしか見えなかったとしても、「きっちり足に合った靴」のように、これまで誰もみたことのない深さに変貌していたとしたら——。それは、ありふれた日常の、何気なく見過ごしてしまいそうな着衣・着脱の体験や記憶がいかに意識化され、機微や肌理に触れる洞察がなされるかに由来するところが多いのではないか。